

中高生とともに差別と闘う

『フクシマの問題』

吉成タダシ



人権のアンテナ

先日も、若い、先生の卵が、「うちの家族が差別を受けている」と深刻な、でも意を決したような面持ちで話しにきました。後日、仲間数人で語り（飲み）に出かけたのですが、彼の話に共鳴するかのようになり、仲間も自分のことを語りはじめました。

やはり、聞いてくれるという安心感があるから、言いづらいことも話せるのではないのでしょうか。言いかえれば、人権というアンテナが見えるから、自分のことを発信できるのだと思います。人権のアンテナの見えないところで自分のことを発信することは、勇気などという言葉が軽々しいくらい、とてつもなく大きな勇気が要するのだと思うのです。そんな場面を学校現場でたくさん見てきました。差別問題に限らず、いじめ問題や子どもたちが直面している生活のありとあらゆる問題、しんどさも同じなのだと思います。

昨年、人権学習の授業で出会った中学一年生の子どもたちから、小学校時代のいじめについての訴えがありました。

「嫌な思いをさせたこと、させられてきたことはありませんか？」

私の問いかけに、「この場では言ってもいいんだ」「やっぱりいじめはいけないんだ」と思えたからだと思います。次から次へと、過去のいじめが語られていきました。時間内に言い切れなかった子たち

は、感想文にその内容をしたためてきました。そういう場を、すべての学校や社会につくり出すことができればと思います。思っていることを受けとめてもらえる、思っていることが安心して言える、そういう実感がもてる人間関係をつくり出していければと思います。

フクシマの問題

福島から横浜へ自主避難した子どもへのいじめが明らかになった昨年、この問題を人権学習の授業で、中学一年生の子どもたちに投げかけた場面がありました。

差別やいじめの問題を、「自分以下を求める心」になぞらえて考え合っていたのですが、そういった心は無くせるのか、無くせないのか。その議論のなかで、この手記を紹介したのです。

「いつも蹴られたり、殴られたり、ランドセルふりまわされる。かいだんでは押されたりして、いつもどこで終わるかかわかんなかったの怖かった。

ばい菌あつかいされて、放射能だと思っていつもつらかった。福島の人はいじめられると思った。なにも抵抗できなかった。

今まで何回も死のうと思った。でも、震災でいっぱい死んだからつらいけどぼくは生きるときめた。」手記を紹介したあと、子どもたちは本当に真剣に捉え、考え込んでいました。

「僕は、自分以下を求める心はな

くせないって言ったけど、やっぱり差別は意識してなくそうみたいに変えます」

「自分以下を求める心を許してしまうってことは、いじめや差別を許してしまうって話を聞いて、自分で自分以下を求める心を簡単に認めてはいけなと思います」

「自分以下を求める心」は無くせるのか、無くせないのか。大人でも難しい議論ではないかと思えます。それでも子どもたちは、自分たちなりに考え、意見を出し合っていて、自分たちそれぞれの答えを導き出そうとしました。初めは簡単に「無くせない」と言い切っていた子どもたちも、少しずつその考えを変えていきます。教師の話やお説教が悪いとは言いません。けれどそれ以上に、自分たちで真剣に向き合い、語り合い、考え合ったことは、自分たちを根っ子から変え、残り続けていくのだと思うのです。

『青春恋愛小説』だけじゃない

私のなかで重なる、フクシマに対する差別と部落差別。そのイメージを大切に描いて書いた小説、「ペットボトル・マジック」。前述の中学一年生たちに手渡すと回し読みをはじめました。

「『ペットボトル・マジック』読んだよ！面白かった！」

そう言って、笑顔いっぱい声をかけてくれました。なかに

「はじめは、『ペットボトル・マジックって何?』と思っていました。途中でペットボトルの底を見て遊んでいたときには、『それだけ?』と思いました。でも最後まで読んで、『そういうことか!!』と思いました。謎の女の子は喜怒哀楽がすごくて、すごく表現力があって、共感できる場所もたくさんありました。」

主人公のコウが十日目、いつもの場所に行ったら女の子がいなくなりました。「なんで?」と思ってきました。最後に電柱にペットボトルがくくりつけてあったところでは泣きそうになりました。ペットボトル・マジックは単純な意味じゃなかった。深く考えれば新たな発見がある、そう感じさせてくれました。

一日一日の出来事がドキドキです。ごくおもしろかったです。」

子どもたちや若者の感性の豊かさには、本当に感心させられます。こんなふうにしてきてくれると、もう嬉しくて嬉しくて(笑)。でもそれは、単に「私の本を読んでくれた」という嬉しさだけではなく、その子から、人権に対する思いや、『自分にとって故郷は大切だけど、それは誰にとっても大切なもの』という思いはちゃんと受けとめたからね」という無言のメッセージが伝わってくるほどの嬉しさでもあるのです。

(次回「ヒナ鳥は飛べるか」